

〔近代世事談綺人事〕傾城

遊女をさして傾城といふは、寛文のころよりいひはじむといへり、遊女は江口神崎等の船著にありて、船にのりて毎船に来るゆへに、ながれの女うかれめ、浮女うかれめなど、いふ也。略下

〔宇治拾遺物語十二〕いまはむかし、一條棧敷屋にある男とまりて、けいせいとふしたりけるに、夜中ばかりに、風吹雨ふりて、すさまじかりけるに、大路に諸行無常と詠じて過るものあり。略下

〔運歩色葉集加〕河竹カクタケ傾城之異言

〔倭訓栞中編十七〕ながれののみ

遊女をいふ、以言見遊女詩序にも、維舟門前遲客河中と見えたり、よて川竹の流れの女ともいふめり、ながれの君も同じ、

〔謠曲〕斑女

シテ女 實や本よりも定なき世と云ながら、うきふししげき河竹の流れの身こそ悲しけれ、

〔我衣〕傾城傾國アリス唐ニテハ美人ノコトヲ云、日本ニテ賣女ノコトヲ云ハ誤レリ、賣女ヲ唐ニテ

ハ妓女ト云、上郎トハ諸侯ノ召仕女ナリ、賣女ハ女郎ト書ベシ、

○按ズルニ、女郎トハ、素ト賣女ノ事ニアラズ、古木蘭詩ニハ、同行十二年不知木蘭是女郎トアリ、庾信詩ニハ北堂細腰杵、南市女郎砧トアリテ、共ニ女子ノ事ナリ、

〔物類稱呼一論〕遊女、うかれめ、畿内にてをやま、又けいせいと云、江戸にては女郎ぢやうらうといふ、江戸を

戯場やまにのみ有ハ、伊勢の山田にて艶女あんなといふ、同國鳥羽にてはしりがねと云、鳥羽ハ湊成みなとによりて、

詞なる、近江にてそぶつといふ、出羽秋田にてねもちといふ、奥州にてをま、やらくといふ、國に遊

女ををなさしめてもいふなるべし、奥州松前にてやかんといふ、越前敦賀にてかんひやうと云、夕ゆふがほ

心なり、又越前越後の海邊に浮身うきみと云、物有、是は旅商人此所に逗留の内、女をまうけて、夫婦の

如くス、此家を浮身宿と云、